
LOST IN THE BLUE

犀川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOST IN THE BLUE

【Nコード】

N4330R

【作者名】

犀川

【あらすじ】

大学卒業を目前に控えた工藤新一が、迷走する物語。

前編

季節は過ぎ、気がつけば東都大学の正門前にそびえ立つ桜の木にも、淡い薄紅の蕾が付き始めた。

大学4年生、卒業を直前に控えた最後の春。思えば大阪の口煩い色黒男の上京に始まり、元大怪盗と学友として再会するなど入学当初から様々なハプニングはあったが、4年間通い慣れた大学ともこれでお別れである。

……かと思いきや、ゼミの教授の熱烈な弁に押されて自分はすっかり大学院へ進学することになってしまい、卒業後の就職先も確定して卒業旅行を企画する友人達の中でも、何かと取り残された存在になってしまった。いっそ巣箱を旅立つ雛鳥を見送る親鳥のように達観することが出来たなら、また違った心境で居られたのだろうが生憎、自分はそこまで人間が出来ていない。

卒論提出後、高校以来交際を続けている幼馴染の彼女を1ヶ月ぶりに食事に誘った。

その際、もの憂い気な心の内を正直に告白すれば、思い掛けず『それは高校生の頃、私がいつも新一に感じていたことよ』と一笑に付され、てっきり親身になって応対されるものと考えていたこの思いは、完全に行き場を失ってしまった。

『新一。デザートのアイス、食べないなら私が食べてもいい？』
そんな俺のことなどお構いなしに、テーブル向かいで無邪気な笑顔を振りまく彼女。俺は無言で彼女にアイスカップを差し出した。

——アイス一つで罪滅ぼし出来るなら、安いものだ。

そう考えてから、不可抗力だったとはいえ、当時の好奇心旺盛で

前しか見ていなかった自分を無性に攻め立てたい気持ちになった。そう。人の感情とは、非合理的に出来ている。

正門の桜を横切り、自分が所属している文学部の学科棟を過ぎる。後期定期試験も終わり、学内は既に春季休業に突入しているが、学内はサークル活動をする学生や、4年への進級と同時に配属された研究室へ足を運ぶ理系学部 of 学生、または就職活動のために学内のキャリアセンターに通う学生などで賑わっている。とは言っても、やはり2ヶ月ある春休みを存分に外で満喫したい学生が大勢だろうから、人通りを数えるなら平常時の半分以上と言っている。これがまた4月になると、新生活への期待で胸を膨らませる勤勉な新入生の登場によって混雑するのかもしれない、足元から憂鬱な気持ちが這い上がってくる。前年度のように、カフェテリアで新鮮なコーヒー一杯を頼むのに、30分以上待たされるのだけは勘弁して欲しい。

(いっそ、犯研の院生部屋にサイフォン式のコーヒーメーカーでも持ち込むか)

寂しさの波が、心の岸部に押し寄せる。

あれこれ思考を巡らせているうちに、薬学部の研究棟へたどり着いた。所属する学科から、普段は文系の建物に出入りすることの多い自分にとって白衣を纏う学生で溢れるこの棟は、得意なサッカー用語を引用するなら『アウェイ』である。

自動ドアの前に立つと、反対側から見慣れた茶髪の女性が向かってきたから片手を上げた。膝丈まである白衣をラフに羽織った彼女は、俺の姿を認めると口元を僅かにつり上げて歩いて来る。

「調度良かったわ、工藤君。これから貴方の研究室へ行こうと思っていたの」

宮野志保。かつて俺の隣家に住む工学博士の元で居候していた彼女は、自分より1歳年上という年齢であるが、10代のうちにアメリカで薬学博士号を取得しており、現在は薬学部の新薬開発系の研究室で助教として働いている。

「すれ違いにならなくて良かった。俺、今日は犯研に顔出して無いから」

犯研とは、俺が所属する犯罪心理学研究室のことである。今大学に来たところだということを告げると、彼女は少し驚いた顔をして、それから俺の腕を掴んだ。そのまま俺を連れて薬学部の棟から離れようとしたから、俺はバランスを崩して前のめりになった。

「おい！何すんだよ」

思わず素の口調になると、宮野は俺の腕を掴んだまま、

「バカな探偵さんの目を覚まさせるのよ」

「俺ならちゃんと起きてるだろ」

「バカね」

何故、短時間に二度も彼女からバカ呼ばわりされなければならぬのか。

宮野に引き連れられるまま再び学内の通りへ戻ると、周囲に居た学生から次々に奇異なものを見るような視線を受けた。中には『ちよつとあれ、工藤新一じゃない？』という自身の素性に関した発言まで飛び交っている。冗談じゃない。

「離せよ」

カフェテリアの正面まで来たところで、俺は宮野の手を思いきり振り払った。そして立ち止まる。次いで、俺の腕を引いて前を歩いていた宮野も俺を振り返り、立ち止まった。向かい合う沈黙が堪らず、文句の一つでも彼女に言おうと口を開いた方がいいが、何故彼女が出会い頭に突然このような行動に出たのかが分からない。検討がつかずに言い倦ねていると、彼女はポツリと呟いた。

前編（後書き）

犀川です。現在は別作品の連載中ですが、知人に『アンニユイな工藤が宮野に横っ面を叩かれる話を書いて欲しい』とリクエストされて突発的に書きました。結果、横っ面を叩くどころかお互い妙にデレて終わるという収集の付かない話になってしまいました。伏線も詰め込みすぎて、正直読み手の方にちゃんと伝えられるか微妙なところでした。そして実はこの話、犀川の私生活が元ネタでして……正直載せるか迷いましたが、折角なので。後編は目が覚めたら投稿します（！）

※ご指摘を受けて宮野の級を修正しました。

後編

「警視庁の捜査顧問」

小さな音の振動を鼓膜に受け取った俺は、気まずさに宮野から視線を逸らした。

「貴方、警視総監から直々の申し出を断ったそうね」

「……どうしてお前がそれを知ってんだよ」

不穏な空気を嗅ぎつけたのか、カフェテリア周辺に居た学生が僅かにざわつき始めた。外で口の悪いところを他人に見られるのは好ましくなかったが、もはや表面上を取り繕うのも面倒だ。まだ誰にも話していなかった出来事を他人の口から暴露されるのは、気分の良いものじゃない。

「白馬から聞いたのか？　そういうばお前、最近アイツとやけに親しくしてるみたいだからな」

「あら、妬いた？」　「そういう話をしてんじゃねえよ」

これは肯定と取っていいだろう。2週間ほど前、元怪盗と大阪の色黒男の誘いで高校時代の大阪組と江古田組、帝丹組が集まり中規模な合同コンパが開催された。その際、俺は宮野を誘ったのだが、面倒なことになるなら彼女を合コンになど誘うのではなかった。あの日以来、彼女は江古田生だった警視総監の息子の誘いで度々外食に出かけている。

「でも、お前がこの話を聞いてそんな大胆な行動に出るなんて、驚いたぜ」

「貴方、こうも言ったそうじゃない。今後は表向き探偵として活動

せず、大学院生として学業に専念する……アイドル気取りの引退会
見もいいところだわ」

「警視総監は親子揃ってお喋りなんだな」

「貴方は期待されている、ということよ。本当はこれから貴方の研
究室の教授のところへ行って直接話をするつもりだったけど、貴方
が研究室に顔を出していないのなら話は別よ。その様子だと、まだ
教授にはこの話はしていないんでしょう？」

予想外の言葉に、つい嫌味を言うのを忘れた。

「ああ。……これからお前に相談するつもりだったから」

再び宮野に視線を戻すと、宮野は僅かに目を見開いて眉を寄せた。

「——そう。そうだったの。それなら話は早く済んだわね。この
件、私は反対だから」

これ以上何も言うことはないと言いつつ踵を返して見えた背中では、心なしか
普段よりも小さく見えた。

「宮野」

思わず呼び止めると、宮野は俺に背を向けたまま、

「貴方が何を考えているかは知らないけれど、日本警察の救世主、
平成のシャーロック・ホームズとまで謳われた貴方がこんなにも簡
単に天職とも言えるべき探偵を辞めるだなんて、私は認めない」

「……え？」

「——正直、呆れたわ。私には、組織時代の罪滅ぼしのためにも
薬剤研究を続けろなんて都合のいいこと言っておいて、自分は一番
に逃げるのね」

春一番が、宮野の言葉をかき消した。風になびく宮野の白衣が不意に元怪盗のそれに見えて、彼女はそのまま風に飛ばされて何処かへ行ってしまうのではないかと場違いなことを思った。咄嗟に手を伸ばそうとするも、木々のざわめきと舞い上がる土埃に視界を阻まれる。

「……なんてね。貴方が居なくても、私は私の道を進むだけよ」

「宮野！」

俺はもう一度彼女の名を叫んだが、彼女には届かなかった。

吹き抜ける風が止んだ時には、彼女はもう俺の視界から去っていた。

——ああ。

俺は、視界が暗転する感覚に囚われた。そして唐突に全てを理解した心境になる。視線を足元に向けると、そこには小さな石ころが転がっていた。反射的に蹴り飛ばそうと右足を上げたが、深呼吸して押しとどめる。衝動のままに行動できるほど、自分は子供じゃなかった。

自分は結局、何がしたかったのだろう。ふと、思う。誰かに理解されたかったのか、気持ちを共有できる仲間が欲しかったのか。自分も身近に居た同期生と同様に心機一転した気持ちを味わいたかった？……馬鹿馬鹿しい。そう考えると、急に何もかもがどうでも良くなってきた、それと同時に何処か遠くへ行きたい気持ちが心のなかに芽生えた。

けれど、その前に。

俺はズボンの尻ポケットに入れた携帯電話を取り出し、アドレス帳を開いた。番号を選択して通話ボタンを押すと、単調な電子音の後にコール音が数回鳴った後に、慌てたようなひっくり返った相手の声が聞こえてきた。『工藤君！工藤君じゃないか！もう二度と連絡は無いものかと――』

「お久しぶりです、目暮警部」

捲し立てるように次々と言葉を並べる馴染みの刑事に思わず苦笑いしながら、俺はカフェテリアを離れ、東都大の正門へ向かった。今日は大学まで歩いて来たから、警視庁までは電車かタクシーで行かなければならなかった。足の速さを考えるなら、値段は割高だがタクシーのほうがいいだろうか。そうだ、警視庁で用事を済ませたら帰りは銀座に立ち寄ろう。たしか最近、パリ帰りのパティシエが開いた人気の洋菓子店があると宮野が話していた。甘いもの好きな愛しの幼馴染へ土産にするのも悪くない。そしてひと通りドサ回りを終えたら、その足でロンドンへ向かおう。元々更新手続をするつもりで、手持ちのかばんの中にはパスポート一式が入っているし、衣服は現地で調達すればいい。大丈夫、現地の地理は全て頭に入っている。憧れのホームズが住む街で、シャーロキアンな一人旅を存分に楽しもう。

非合理的なものに振り回されるのはもう、これっきりだ。

後編（後書き）

おはようございます！……嘘です。目が覚めたら後編を投稿すると宣言しておきながら、今日は朝から打ち合わせが入っていたのを忘れていました。呼び出しの電話で目が覚めて、顔も心も真っ青……というのはさておき。LOST IN THE BLUE。知人のリクエストで書いた話ですが、ご期待に添えたかどうか。

ちなみにこの後、工藤は警視庁で捜査顧問の話を受けます。そして帰りに銀座でケーキを買って宮野の元へ。宮野には「蘭に買うついでに」とか言ってケーキを渡します。そして捜査顧問を引き受けたことは言わずにロンドンへ飛び、一人旅から帰国してからようやく「探偵を続ける」と告げる。けれど、宮野は既に白馬から工藤が捜査顧問を引き受けた話を聞いていたから、特に驚きもせず「そう」とだけ言って話は終わる。お互い妙なところで素直になれない。物語の都合上、白馬は宮野にアプローチしている設定になっていますが、実際の彼はどんな女性が好みなのか……どなたか、ご存知の方はご一報下さい（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4330r/>

LOST IN THE BLUE

2011年10月7日03時48分発行